

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22500699

研究課題名（和文） ライフコースにおけるケアの受容性に関する研究

研究課題名（英文） A study on acceptability of care in the life course

研究代表者

杉井 潤子（SUGII JUNKO）

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70280089

研究成果の概要（和文）：

大衆長寿高齢社会において、老いることを忌避し排除する意識が根強く、自立志向が強いなかで「できていたことができなくなる」という要介護性を受け入れることは難しい状況にある。本研究はライフコースにおけるケアの受容性・対等互酬性という観点から、「保育における要養護性」と「介護における要介護性」の対比検証し、生－老－病－死を紡ぐ連続体として理解する試みを行った。その結果、同質性と異質性が明らかになるとともに、高齢者の「負の学習」（できなくなることを学ぶ）と要介護性（ケアされることを受容すること）を相対的に理解することの重要性を指摘した。

研究成果の概要（英文）：

In modern Japan, which faces a super-aging/mass longevity society, aging is regarded as a matter of course, both in terms of social structure and personal life courses. Over a prolonged life course, dependency should be assumed as an inevitable part of life. This research carried out contrast verification of "child-rearing" and the "care for the old" from a viewpoint of the care in a life course. Reconsideration of the natural providence of birth, aging, sickness, and death may be needed. Because the four inevitables in life remain constant regardless of longevity, it is important for elders and society to view the aged and aging with an emphasis on accepting and understanding dependency, as well as maintaining health.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：生活科学

科研費の分科・細目：生活科学一般

キーワード：ケア、介護、要介護性、保育、要養護性、ライフコース

1. 研究開始当初の背景

少子高齢化の進行が叫ばれて久しい。我が国はすでに 2005 年から第 2 の人口転換である「人口減少社会」に突入している。併せて、平均寿命の伸長も著しく、「長寿の大衆化」が進んでいる。個人のライフコースにおいて「高齢者になること／高齢者であること」はもはや自然なことである。さらに要介護者や認知症の増加という現状をふまえると、同時に「要介護になること／要介護であること」も所与のこととして受け入れることが求められている。具体的には WHO によって「健康寿命 (healthy life expectancy)」という概念が提起され、平成 18 年度版国民生活白書 [内閣府, 2006] において 65 歳時点での平均余命は男性 18.21 年・女性 23.28 年であり、そのうち「無障害平均余命」は男性 12.64 年・女性 15.63 年と算出されているが、言い換えると男性 5.57 年・女性 7.65 年は必然的に介護の受け手となることが想定されている。しかし、その一方で、現代社会においては老いの価値が相対的に低下するとともに、要介護性に関連して、個人—家族—社会の 3 重で巧みに高齢者を差別し排除する構造が存在することも指摘できる。具体的には (1) 高齢者に対する社会的選別・排除、(2) 高齢者に対する差別偏見・エイジズム、(3) 高齢者虐待、(4) 介護をめぐる親族間殺人・介護心中や囑託殺人、(5) 高齢者の自己排除・自虐や自殺などである [杉井潤子, 2007, 2009, 2010]。

超高齢・長寿社会の「生きにくさ」を背景として、長寿高齢化の進展によって工業化を推し進めた「生産性／生殖性」の価値に代表される人間形成原理ではもはや人生をまっとうできず、加齢にともなう「老い」「病い」「死」の価値や意味が問われることになると指摘されている [小倉康嗣, 2006]。生き方、さらに老い方を問い直す意味で、加齢の「発達的变化」に関して、個人のライフコースを「自律性の連続体」 [藤崎宏子, 2000] として理解しようとする理論的言及もなされている。現代を生きる高齢者は、さまざまな葛藤とリスクを負いながら、「自らのアイデンティティの意識的な維持管理者」 [野沢慎司, 2009] としての生き方が問われているともいえる。

超高齢・長寿社会を生き抜くには、加齢と心身の老化プロセスのなかに、健康の保持と要介護の受容という、いわば自立性と依存性という二面をバランスよく組み込むことが求められる [杉井潤子, 2009, 2010]。とくに、要介護性をどのように理解し、受け入れていくかが高齢者自身にも、また家族を含め地域、社会全体においても重要である。生—老—病—死を紡ぐライフコースにおいて、個々人がいつ誰からどのようなケアを受けるのか、あ

るいは受けざるを得ないのか、要介護性を包摂した超高齢・長寿社会の生き方／老い方を実証的に検証することが急務の課題であると考ええる。

2. 研究の目的

現代を生きる高齢者は、経済効率や自己実現という価値基準のなかで、自立すること、さらに介護予防の施策からいかに健康を保持するかが志向されている。老年期・終末期を全うするには、要介護になることをも受容しなければならぬことも事実であるにもかかわらず、要介護状態になることや認知症への恐怖、不安などケアの受け手となることを忌避する意識がきわめて大きい。そこで、本研究では、要介護になり、ケアの受容体になることをなぜ不安視し忌避するのか、さらにはサクセスフルエイジングやアクティブエイジングの提唱により、「老いても、なお（あるいは、まだ）できること」に価値をおかれ、その一方で、「かつてできていたことができなくなること」「元気だった親が年老いていくこと」をなぜ受け入れられないのか、要介護性の受容が困難な過程を探り、超高齢・長寿社会の老い方、さらには生き方に対して学術的示唆を提供し、貢献することをねらいとする。

そのために、具体的には、これまで別次元でとらえられてきたライフコースにおいてケアの受容体となる「保育／子育て」と「介護」とを、生—老—病—死を紡ぐ「自律性の連続体」としてとらえなおし、「保育における要養護性」と「介護における要介護性」を対比する。その同質性と異質性を検証し、対等互酬性の観点から相対的に理解し、加齢にともなう「ケア」の受容性を再評価することを目的とする。

従来、「保育／子育て」と「介護」は、学校教育においても、また生活科学研究分野においても、別次元として理解され、それぞれに研究されてきている。またケアに関しても、高齢者介護、病気看護、障害者介助においてケア概念が用いられることが多いのが特徴であり、子どもを対象とする保育・子育ては、同様にチャイルド・ケアであるにも関わらず、概念的に別個のものとして理解されてきた経緯がある。いわば、要養護性と要介護性は別次元で理解され、それぞれに子ども理解、高齢者理解がなされてきたと指摘でき、同次元でケアとして継続的に理解していこうとする発想がなかった。近年、子どもと高齢者の比較、育児と介護の社会化を「人間の三世代モデル」 [広井良典, 2006]、あるいは「老・障・幼の統合」 [上野千鶴子, 2009] の観点からとらえ直そうとする動きはようやくわずかにみられるにとどまっている。

3. 研究の方法

ライフコースにおけるケアの受容体として「子どもであること／子どもであったこと」「高齢者になること／高齢者であること」、さらに「要介護になること／要介護であること」を対比するために、次の3つの研究をおこなった。

(1) 北欧福祉先進国であるフィンランドにおける保育（Child-care）施設および高齢者介護（Care of the elderly）施設におけるケア概念の聞き取り調査、ケア教育施設における保育士・介護士養成カリキュラムの資料収集を通して、ライフコースを通じた連続体としてのケア意識が醸成されているのかどうかを分析し、検証した。

(2) ライフコースにおける要養護性と要介護性の対比に関する調査研究を通して、保育・育児および介護にかかわる市場商品や社会施策サービスを取り上げ、同じケアの受け手として子どもや高齢者が想定されているにもかかわらず、子どもの成長発達に接する保育・育児と、高齢者の加齢老化に接する介護を同じ視点でとらえ、比較検証した。

(3) 「高齢者の要介護性受容困難」に関する国内外の資料および文献収集を通して、
・なぜ、健康で自立的なライフコースが社会的にも期待され要請されるなかで、要介護性や死という自然の摂理を隠ぺいするような社会的認識が生み出されてきているのか
・要介護になったときに、自己の尊厳をどのように保持するのか、終末期ケアを分析し、検証した。

4. 研究成果

平成22年度は「保育／育児」と「介護」を比較し、ケアの同質性と異質性を検証する手立てとして、北欧福祉先進国であり、脱家族化が進むと考えられるフィンランドのヘルシンキ市の、(1) 子どものケア関連施設：市の政策方針のもと幼児と高齢者との交流プログラムを進める保育園、妊娠―出産、就学前までの保健・子育て支援施設、(2) 高齢者のケア関連施設：高齢化研究所、高齢者サービスホーム、デイサービス施設、在宅家族介護者連合、(3) ケア教育施設：保育士・看護師・介護士などケア教育職業専門学校等を訪問し、ケア概念の捉え方について聞き取り調査および資料収集をおこなった。その結果、福祉国家にあって構造的に子どもと高齢者双方のケアについてそれぞれに充実した方策、あるいは保育園と高齢者施設の建物がつながり、緊密な交流が意図的に図られたり、ケア教育職業専門学校において保育士と介護士の養成が図られるなど、ケア育統合に向けて注目すべき点が認められた。しかし、社会民主主義の福祉国家においても、子どもを対象とした保育・育児と、高齢者を対象とした介護を比較

すると、理念としてライフコースにおける連続体として統合的に理解されているわけではなく、夫婦単位の介護ケア、親子単位の保育ケアという枠組みのなかで、介護よりも子どものケア主軸の社会システムが強固に存在しており、子どもや子育て家族にやさしい社会の確立が優先されていることもあらためて確認された。

平成23年度は、学校教科書、施策サービスおよび市場商品などを通して、ケア内容の比較調査を行い、ライフコースにおける要養護性と要介護性の対比に関する研究をおこなった。その結果、(1) 中等教育家庭科の教科書分析では、人の一生を扱うものの、子どもの成長発達やふれあいに関する保育学習が主であり、高等学校で高齢者理解を学ぶが、あくまでも介護対象となる高齢者についてであり、成長のふりかえりと子ども理解には重きがおかれ、介護は支援の対象として高齢者を理解するにとどまり、保育と介護をケアとして関連付けていく発想は認められなかった。

(2) 対比の視点からの探索研究では、①歯の生え方と咀嚼・嚥下による「離乳食」と「介護食」ユニバーサルデザイン比較、②排せつとおむつによる乳児用おむつと高齢者用おむつの市場商品における認識比較、③子どもの「誤飲」と高齢者の「異食」という理解比較、④保育・介護制度政策サービス比較、たとえば「保育」の非定型一時預かりサービスと「介護」のデイサービス・ショートステイなどの対比をおこなった。その結果、研究視角の有用性が明らかとなり、ケアの視点から理解すると、非常に多くの類似性が認められた。例として下図は離乳食と介護食（形態調整食）を比較した結果である。成長とともにペースト状から固形へという段階を経る離乳食と、加齢とともに老化とともに、固形からペースト状になっていく介護食とは、形態上は非常に似ており、真逆のプロセスをたどることがわかる。ライフコース上でケアの受容体として保育・育児と介護をつなげて理解していく発想は、有効である。

離乳食



成長とともに、だんだん食べられるようになる！

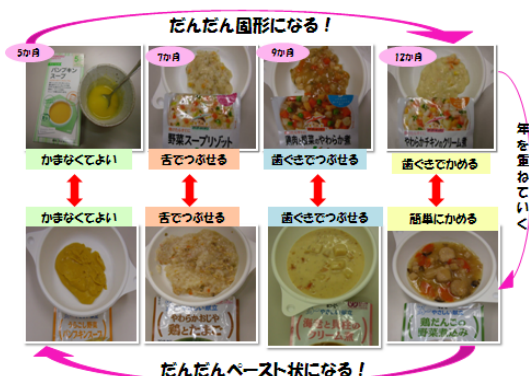
介護食(形態調整食)



ペースト状

固形

加齢とともに、食べやすいものを食べている！



ただし、対比研究の結果、類似性が多く認められるにもかかわらず、たとえば離乳食の開発が歴史的にも早くから始まったのに対して、介護食の開発が遅れてきたことや、売り場での明るさと商品配置などをみると、社会においてその類似性に着目する発想は乏しく、介護よりも保育にケアの主軸がおかれていることも明らかとなった。少子高齢化が進行する社会にあって、双方のバランスがとられる必要があることは言うまでもなく当然の指摘であろうが、次世代育成の観点から保育や育児においてケアを受けること、すなわち要養護性は自然なこととして受け止められているのに対して、介護においてケアを受けること、すなわち要介護性を受け入れることが課題であることも確認できた。

これまでチャイルドケア（要養護性）とナーシングケア（要介護性）の対比研究の結果、共通性や類似性が多く認められたことから、平成 24 年度は、現代のジェロントロジー教育・死生観に関する研究資料の検証を通して、加齢過程において要介護性を受容する「負の学習」の発想と可能性を探究した。その結果、近代は価値構造において成長と老化、あるいは自立と依存を二極対比でとらえてきたと省みることができる。成長とともに「正の学習」（できるようになることを学ぶ）を限りなく価値あるものとし、自立していることを評価する一方、老化とともに「負の学習」（できなくなることを学ぶ）、すなわち「できていたことができなくなることを受容するこ

とはとても難しくなり、「できなくなってもなお、できること」のみに強迫的に固執してきたと言えることが明らかとなった。高齢者自身においても、「わたし、こどもじゃない」「自分でできる」「ひとりでできる」という意識が強く、それは尊厳とともに尊重されるべき非常に大切な意識であり、安易に子ども扱いすることはエイジズムにつながる危険性を孕んでいることは十分に理解できる。しかし、それとともに、生老病死という自然の摂理は、長寿化が進行してもなお変わることがないことをふまえ、「できなくなった」ときや、「かつて子どもであったわたし」を想定し、超高齢・大衆長寿社会において、わたしたち一人ひとりが老いてなお堂々と生き抜くために価値の転換と新たな創造が急がれる。そのためには、保育・育児ケアと介護ケアを関連付けていくことが重要である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 杉井潤子、新たな家族的関係の構築－孤立を防ぐ支え合いをめざして－、公益財団法人ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 「21 世紀ひょうご」、査読無、14 号、2013、14-23

② 杉井潤子、脱家族化、そして新たな家族的関係の構築、日本家政学会家族関係学部会編「家族関係学」、査読無、31 号、2012、25-35

〔学会発表〕（計 4 件）

① 瓜生淑子、幼児期のウソー 保護者アンケート調査のエピソード分析から－、日本保育学会第 65 回大会 2012 年 5 月 4 日 東京家政大学（東京都）

② 杉井潤子、脱家族化、そして新たな家族的関係の構築、日本家政学会家族関係学部会第 31 回家族関係学セミナー 公開シンポジウム「生活単位の個人化の進捗とこれからの家族－孤立した人びとの新しい絆の模索」2011 年 10 月 22 日 関東学院大学関内メディアセンター（神奈川県）

③ Junko SUGII, Ageism encountered in Daily Life in Modern Japanese Society, Conference “Social Status Changes of the Aged People and Ageism Reconsidered” 2011 年 6 月 24 日 Seoul National University in KOREA（韓国）

④ 瓜生淑子ほか、ニュージーランドの保育における Learning Story の実践について－現地でのインタビュー調査から－、日本保育学

会第 64 大会 2011 年 5 月 21 日 玉川大学(東京都)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉井 潤子 (SUGII JUNKO)
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70280089

(2) 研究分担者

瓜生 淑子 (URYU YOSHIKO)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：20259469